

## 選評

加藤弘子

### 野田洞珉筆「鳥類写生図」——尾形光琳筆「鳥獸写生図」との関係——

本論文は、江戸時代の写生図研究に新しい視点と方法を提示した、実に魅力的な研究である。加藤氏がここでケーススタディとしたのは、すでに失われた狩野探幽筆「諸鳥生写」の重模本である野田洞珉筆「鳥類写生図」と、尾形光琳筆「鳥獸写生図」の関係をあらためて明らかにすることであったが、その過程で示された原本不在の模本同士を比較する手法と考証は、独創性と斬新な知見に富む。すなわち、両写生図の形式や描写の差異よりも共通する特色に注目し、画師たちが流派を越え模写を通して共有したものを探るとともに、図像や彩色に関する情報の粗密の微細な差を見出すことによって、原本からの距離を測ろうという手法である。その結果、洞珉写生図よりも光琳写生図の方が原本探幽写生図に近いという、従来説を覆す新説が、十二分の説得力をもって論じられている。特筆に価するのは、この間に作品や実際の鳥に対して加えられた精緻を極める観察である。それにより、両写生図の間にみられる描写の特色として、死後の鳥を写したことに起因する類型的な目の描写、花鳥画の表現を踏襲した定型的な姿勢、表面描写への傾倒という三点が挙げられ、更にその分析を通して写生の実態、〈写生図〉の意味について、普遍性のある見解に到達することを得た。加藤論文の先に、原本不在の〈模本〉研究のさらなる可能性、および〈写生図〉を通しての江戸時代絵画史の問い直しが開かれている、という先見性も高く評価したい。

加藤氏のこうした問題意識が、流派の枠を越えて近世絵画史を捉えなおす大きな視座へ展開することを期待し、『美術史』論文賞を贈るにふさわしい成果として顕彰したい。